平成 25 年度 8020 公募研究報告書抄録（採択番号：13-1-04）

研究課題：個人調査データを用いた、日英の高齢者の口腔の健康の比較研究

研究者名：相田潤[1)]、伊藤奏[1)]、小坂健[1)]、小山史穂子[1)]、近藤克則[2,3)]

所属：[1)] 東北大学大学院歯学研究科　国際歯科保健学分野、[2)] 日本福祉大学　健康社会推進センター、[3)] 千葉大学 予防医学センター 環境健康学研究部門

〈目的〉健康格差の縮小が、国の健康政策である健康日本２１（第二次）に明記され、国際歯科学会で研究課題に設定された。健康格差は、医療受診の格差だけで生じるのではなく、そもそもの病気の発生率の格差によるところが大きく、保険制度が整備された日本や英国においても認められる。国家間の健康格差の比較を行うことは、それぞれの国の保健医療制度や保健政策の違いや影響を類推する上で欠かせない。そこで、本研究では、高齢者における社会経済状態と無歯顎及び、QOL 指標のひとつである口腔の主観的健康感（Self-rated oral health、以下 SROH）との関連を、日本と英国のデータを用いて検証することを目的とした。

〈方法〉2010～2011 年に収集された、自立した生活を送る高齢者を対象とした疫学研究である J-AGES(Japan Gerontological Evaluation Study, 日本老年学的評価研究)プロジェクト及び、一般住民を対象とした疫学研究である ELSA（English Longitudinal Study of Aging）の 65 歳以上の地域在住高齢者のデータを国際比較に用いた。各国ごとに、所得と口腔の健康との関連を、性別、年齢、学歴、婚姻状態、喫煙行動を調整した Log-binomial regression analysis で検討した。

〈結果〉対象者（日本：19,726 名、英国：4,876 名）のうち、無歯顎者率は、日本 15.0%、英国 20.9%と、英国の方が無歯顎者の多い傾向が見られた。SROH に関しては、悪いと感じている群が日本 5.5%、英国 3.5%と、両国共少ないが、若干日本の方が多い傾向が見られた。性別、年齢、学歴を考慮した多変量解析の結果、無歯顎と SROH の双方において、日本と英国共に、所得が最高位の群に比べ、低位群では統計学的有意に口腔の健康状態が悪い傾向が見られた（所得低位群の無歯顎 PR[95%CI]：日本＝1.37[1.28, 1.48]、英国＝1.69[1.38, 2.07]；所得低位群の SROH（悪い）PR[95%CI]：日本＝1.81[1.50, 2.19]、英国＝2.46[1.27, 4.76]）。また、その勾配は日本に比べて英国の方が大きい傾向にあった。所得と無歯顎との関連は、日英とも学歴である程度説明された。そして、英国では保健行動（喫煙）によっても説明されたが、日本では喫煙はほとんど関連を説明しなかった。所得と SROH の関連は、日英両国とも学歴は説明したが、喫煙はほとんど関連を説明しなかった。

〈考察〉　高齢者の主観的及び客観的な口腔の健康は日英共に、所得による格差が認められた。そして社会的勾配は英国の方が大きい傾向にあった。学歴は、所得による口腔の健康格差の一要因であることが示唆された。また、喫煙は、所得による無歯顎の格差について、英国では説明要因となったが、日本で喫煙の所得格差が小さいため説明要因にはならなかった。